

関係ばかりであって、後醍醐天皇にも「建武年中行事」の書があることを想起すれば、この時代の古きものに対する関心の高さに注目すべきものがあることを思わねばならぬが、正直言つて史料としての興味には欠けている。こんなことを書く著者には申訳けないが、これが機縁となつて、万一、北朝歴代の宸翰・宸記が続いて公刊されることにでもなれば、史料として面白くて、宸筆本の伝えられている「光明院御記」などが公刊されることとなるから、それこそ望外の喜びになるのだが、この夢は厚かましすぎるであろうか。

和歌は光厳院御集と風雅集、新千載集などの勅撰集、および隆永和歌集などの私家集や歌合などから天皇の詠歌二八七首を集め、頭註と解説が付けられている。和歌のようなみやびの道には門外漢の筆者では評言も憚るが、『列聖全集』の和歌の部の光厳天皇の項を補つたという意味では、さきの宸記と同じく斯界に裨益するところ大なるものであろう。国枝氏の解説も懇切であるが、筆者などが通読して奇異に感ずるのは、万葉の咀嚼が地についたというようなくことでなく、あれほどの動乱期にまさしく

劇的な生涯をすごされた天皇の詠歌があまりにも没世間的な自然観照や恋歌ばかりであることについてである。その点、「新葉和歌集」の後醍醐天皇・後村上天皇はじめ南朝君臣の和歌は、逆境を生きる人間の苦悩や感慨がにじみ出ていて、読む者の共感をよびおこすのとは、全く対照的である。

それが、伝統的な持明院統の歌風だ、と言われればそれまでだが、さらに深く考うべき緒口になりそうに思える。

最後に、是非付言しておきたいのは、本書の編集に当られた京都大学の阪倉篤義教授をはじめ、和歌の項の監修に当られた大阪市の谷山茂教授など、直接執筆されなかつたひとびとの協力が、この書の価値をますますゆかしいものにして、感ぜられる。そういう意味でも気持のよい書物である。

(B5判本文一七九頁　ロタイプ二六葉
昭和三十九年八月　京都府北桑田郡京北町井戸常照皇寺刊　非売品)

(石田善人)

広島大学寄託

加計隅屋文庫目録 第一巻

広島県山県郡加計町の加計家は、隅屋と称し、近世初頭、銀鉞の開発によって巨富を擁したが、その後寛永末年頃から鉄山業に転じ、これを中心としながら酒造・川舟・農業等を併せ経営した。慶安四年から村庄屋として、また藩の地方役として地方政治に干与した。

隅屋鉄山業の最盛期であった化政期には、鑪二か所・鍛冶屋十一軒・酒造所四か所のほか、広島と大坂に本店をもち、大坂通船二艘・川舟十八艘・土蔵三十六か所・借屋四八九竈・家賃二一一人・牛四八匹・馬四八七匹を有したという。

故藤田五郎氏によって、後進地帯における農奴主マニユファクチュアと規定された『封建社会の展開過程』加計家の経営については、かつて本欄でも紹介した『加計町史』(本誌四五巻六号参照)にさらに詳しいが、その数方点に及ぶ膨大な史料が、『加計隅屋文庫』として広島大学に寄託され、目録が同大学国史研究室の教官及び大

学院・学部学生諸氏の協力により順次刊行されることになった。計画では、鉄山関係・地方関係・山林関係・家政関係その他の文書之部四巻、典籍之部一巻、合計五巻になる予定のよし。第一巻は鉄山関係の殆ど全部を網羅している。

内容は、甲「生産」、乙「販売」、丙「その他」、丁「藩營鉄山」に分類され、甲・乙は共に元禄以降の鉄生産と販売の史料を、丙は明暦二年の鉄山格式以下運上銀などの対藩関係・売券・貸借証文・砂鉄銑鉄の運搬関係・米炭直段・絵図等を収め、丁では山県郡大塚村・溝口村で稼行された藩營鉄山関係史料を、それぞれ目録として収めている。その余慶をこうむるところ、ひとり鉄山史の研究者のみならず、近世史研究の全般に及ぶであろうことはいうまでもない。関係諸氏の労に感謝するとともに、所蔵者であり刊行者でもある加計氏に敬意を表し、あわせて第二巻以下の速やかな刊行を願ってやまない。

(B5判二九四頁 昭和三八年一月刊 事務取扱 広島大学附属図書館)

(朝尾直弘)

豊中市史編纂委員会編

豊中市史

豊中市当局においては、昭和三十一年十一月、いわゆる市史ブームのさなかに、市政二十周年記念事業として、今は亡き魚澄惣五郎博士を委員長に仰ぎ、市史の編纂に着手した。その執筆には鳥越憲三郎・小林茂・藤沢一夫・末中哲夫・藤本篤・加藤重義の諸氏が当り、昭和三十四年三月本編第二巻の発刊を手初めに、三十九年五月本編第四巻の頒布を最後にして、本編・史料編各四巻の計八巻の浩瀚な市史の刊行を完了した。これを手にして先ずその装釘・印刷の実質的で、しかも物惜しみしない技術の豪華さに好意が感じられるが、更に内容を繕いて、本編では市史の事実が精細に調査され、国史の流れの中において叙述されていること、史料編では考古資料のコロタイプ写真と解説、古代から近世に至る豊富な文献史料を収録し、ことに学界未紹介のものを含む中世の地元史料が全面的に収められていること等において簇出する地方史誌の中でも特に出色と信じるので、敢えて紹

介の筆をとる次第である。

先ず本編第一巻の考古学の分野では、遺物・遺跡それ自体に関する詳細きわまる調査が記され、史料編における豪華な写真・解説と相俟って本書の一特色をなしている。そしてそれらを歴史学の問題に安易に結付けないのもよいことである。考古学と歴史学の関係について学問自体の性格がたがいに異なるのか、それとも両者は分化すべきでなく総合さるべきなのか、いろいろに考えられるが、安易な総合はあくまで排除すべきであろう。ただ「新撰姓氏録」にみえる氏族名と現在地名・古墳の一体性について推定が試みられているが、相互に時代的な食違いのあり得ることを考慮した上で可能性の問題として叙述されたのなら一層よかつたと思う。

次に律令時代の章で、倭名抄豊島郡の郷のそれぞれの区域をすべて現在の地域に決定つけてあるのは(一ノ一三六頁)いかがであらう。郷区域の現地比定は江戸時代の地誌以来たびたび試みられているが、そう判るはずのものでない。ことに流布本の載せている余戸など特殊な狭い地区に相違ないが随分広域とされているのはどうであろう